

ダルガー参拝

古橋 達弘

2002年5月、修士論文の資料作成にと渡印した際、アジメールのダルガーに参拝する機会があったのでそのことを記しておこうと思う。今回の目的はその境内にあるモスクと、建築物の配置をみることにあったが、多分に宗教的な聖域に宗教とは全く関係ない目的で侵入しなくてはならないため、何か非礼があっては面倒だと、ホテル付きのガイドを雇って廟に向かった。ガイドはイスラム教徒である。

廟内は土足厳禁なため、靴を預けて中に入る。二重の門を抜けると両脇に巨大な鍋（ディグ）がある。左のものは右に比べて若干小さい。下から見上げるような鍋には階段がついていて一見鍋とは思えない。これは聖者の命日に食事を施すために使うのだ、とガイドが説明した。こんな大きな鍋でカレーを煮るとでもいうのだろうか。調理中に落ちたら大火傷どころか死ぬだろう。ウチの旦那はカレーに落ちて死にました、という話は聞いたことがないが、もしそうならやるせない話だ。

少し進むと右手に白いドームを冠した廟堂が見えた。聖者が祀られているにしては意外と小さく質素である。すぐにでも廟堂内に入りたかったが、ガイドは右手にある供物を売る店に立ち寄り店主と言葉を交わした。すると店主は、この線香が幾らで、供物が幾らで、チャーダル（聖者の記念碑の上に被せる布）が幾らで、と説明を始めた。聞いてもいない値段を言うとは一体どういうわけなのだ、と

怪訝な顔をしている私を見てガイドは「お参りには必要ですよ」と言った。ここに来るとは即ち聖者廟に詣でることだと理解されて当然だろう。私にはここで「誤解だ」という、一種冒瀆的な言葉を発するだけの勇気がなかった。一番安いチャーダルと籠一杯の生花（萼より上の部分だけで茎などはない）、線香等締めて300ルピー（約900円）を支払うはめになった。予想外の出費だが、参拝方法を知るためだと本末転倒気味のこの状況を誤魔化した。

廟堂の手前に白鬚の老翁が座っていた。まさかと思ったが、ガイドはやはりそこに私を連れて行った。座れと促されて座ると老翁は「どこから来たんだね?」と言った。ガイドが「日本ですよ」と代わりに答えた。

「では、君の寄付金だが、1150ルピー（約3450円）でどうだろうか?」

寄付すると言った覚えはない上に、どうだろう?とは何事か。しかも何を基準にその額を決めたのか。

「手持ちが無いなら後日このガイドに渡しても構わないから。勿論、無理にとは言わない。何人たりとも他人に無理強いしてはならないものだ」

こうしている間も私の側を廟堂に向かうインド人が幾人も通り過ぎて行く。なぜ彼らは金を払わないのだ。彼らと私とでは何が違うのだ。納得いかないが何れにせよ払わずしてこの状況を打開できないと諦め、金を渡した。

老翁は台帳に記入し始めた。「住所は」と言いかけて老翁は、どうせ聞いても仕方がないとばかりに、住所欄に大きく「JAPAN」と書いた。

次に老翁は、君は仕事をしているか？等些細な質問をした。それがどういう意味なのか分からなかったが、逐一正直に答えた。質問を終えると老翁は胡座をかいた脚の上に手を置き、掌を上に向けて目を閉じると祈願の文句らしい言葉を呟き始めた。老翁の仕事はこれだった。

頭を覆わないと無礼だというので、白いレース編みのような帽子を被ることになった。インド人の頭は日本人に比して小さいせいもあるが、生来私は頭が大きい方なのでガイドの用意した帽子が入らない。彼はその帽子を私の頭に合うように思い切り引き延ばした。するとそれは今や帽子の形を脱し、言うなれば花瓶敷きとなった。例え花瓶敷きでも頭を覆いさえすればよいのだろう。

方形の室の中央には天蓋付きの祈念碑があり、その上には奉納された種々のチャーダルが掛けられ、花が無造作に撒かれていた。その周囲は真鍮製の柵で四角く囲われている。時計回りに巡る慣わしに従い、人は皆柵に沿ってその方向に進むが、立ち止まって熱心に祈る者に通路を塞がれ、狭い室内は雑然としている。ガイドは記念碑に一番最初に掛けられた最も立派なチャーダルの端を掴んで私の頭に載せ、そのまま祈りの言葉を口にした。他を見ると、ゆとりのある者が先に幾らか払い、柵の内にいる僧(?)にこうして貰うらしいことが判ったが、ただ、私の場合にはそれがあらぬ出費であり、祈るのはガイドだという大きな違いがある。

祈りの後、ガイドは私が先程購入したチャーダルを記念碑に掛けると、花籠の花を記念

碑に投げろと言った。私がおの通りにすると、彼は記念碑の上に載ったものから花卉を数枚手に取り、食べと言うので口に入れた。噛むと苦味が口中に広がった。腹をこわさないか心配になった。

一連の儀式を終え、記念にと言って境内の写真を撮り、メモをとった。そして思う。少しのことにも先達はあらまほしき事なり。